木漏れ日の下にお弁当をもっている少女がやってきた

そこに食べるところをしつらえると向こう側から心地よいそよ風が流れてくる

それからしばらくして

そこを通りすがった老夫婦が向こう側にきれいな花を見つけて

もっと大きく開けてきれいな風景にうっとりする

気がつくと

あっちこっちからみんながやってきて

大きな座るところでにぎやかな宴がはじまった

やがて　花が散り　そこは「壁」にもどっていた

こんどはボールをもった少年たちがやってきた

meme の壁　―創造と記憶によるコミュニティモデル―

「わたしたちは文化的伝達の構成単位、あるいは模倣の構成単位という概念を伝える名詞を必要としている。それにぴったりなギリシャ語の語根に＜mimeme（模倣する）＞があるが、わたしが欲しいのは、＜gene（遺伝子）＞という言葉と音の似ている単音節の単語である。…許されるのであれば＜mimeme＞を、＜meme（ミーム）＞と縮めたい。…これは＜memory（記憶）＞、あるいはフランス語の＜même＞と関連づけることもできる」

―リチャード・ドーキンス『利己的な遺伝子』

感覚をひらく

ひとは自然の中に置かれたとき、何を頼りに自らの居場所を選び取るのだろうか。
水のせせらぎが聞こえるところ、花の香りがするところ、涼しい木陰など、自らの感覚をめいっぱい働かせて居場所を探すことだろう。

現代の生活は便利さを求めるあまり、あらゆる「もの」のリアリティを喪失させてきたと言ってよい。
その中で五感や愛着、共感、違和感などといった人間の豊かな感覚は衰えていくばかりである。

環境と調和する豊かな生活へ向けて、身体と頭脳を再び統合する、すなわち感覚をひらくことが必要なのではないだろうか。

コミュニティのかたち

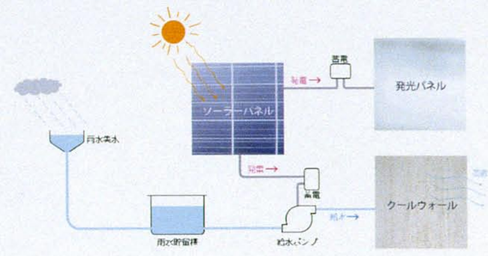
コミュニティの意義の変遷により、現代社会において、「集う」コミュニティは非現実的になってきている。特別な場所に出向くのではなく、日常生活の一部として、仕事や買い物の合間に自然とコミュニティが形成される環境が欲しい。みんなが同時に集まるのではなく、ひとりでいてもコミュニティを感じることができる場が欲しい。そこで、情報化によって失われてきた「もの」を介してつながるコミュニティが求められているのではないだろうか。

ある「もの」を使うひとの感情や行為が、足跡としてそれに刻まれる。その足跡を触媒として、ひとのアクティビティが突然変異、自己複製、自然淘汰、組み替えをくりかえし繁殖・消滅していく現象は、コミュニティの生成過程ととらえることができる。すなわち、「もの」を媒体として meme を伝達することが本質的なコミュニティのかたちといえよう。

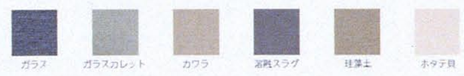
日常生活における人々の交流を豊かにするコミュニティモデルとして、「meme の壁」を都市空間に挿入する。

環境にやさしい「壁」

エコシステム
「壁」の一部をソーラーパネル、発光パネル、クールウォールとすることで、自然エネルギーを利用したエコシステムとして機能する。太陽光発電による電力により雨水をクールウォールに送り、打ち水効果を生み出し、ヒートアイランド現象の抑制に貢献できる。日中の蓄電で発光パネルを光らせ、夜間の照明を補完する。



廃材利用
クールウォールには、使用済発泡スチロールのリサイクル材に再利用が難しい廃材を入れて成型したパネルを利用する。軽量で保水性が高く、かつ環境にやさしい素材である。



「壁」によるコミュニティの生成

「壁」のしくみ
これはヒンジでつながれた面の集積体である。各々の面は、ヒンジを軸にして容易に動かすことができる。面は、ひとの感覚によるアクティビティが発現しやすいように、身体スケールにあわせた 350mm 角を最小単位とした。

コミュニティ生成のモデル
- ひとは、感覚を働かせて一枚の「壁」からある面を動かし、自分の居場所を獲得していく（突然変異）
- まわりの環境、自分の感情などによって様々な場所がつくられていき、「壁」にその足跡が刻まれる（記憶）
- 足跡は合意を得れば残り、そうでなければその形を変えられていく（自然淘汰）
- 同じ形状のままであっても違った使われ方をすることもある（自己複製）
- 複数の場所が結合し、スケールが飛躍して全く異なるものへと変化することもある（組み替え）

これらを繰り返すことによって、「壁」を媒体として創造される空間は時間や季節の変化の中で以下の３つの段階を流動的に移行しながら、その瞬間瞬間において大小のコミュニティを生成していく。

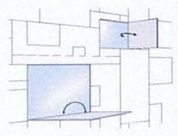


fig1.「壁」のしくみ

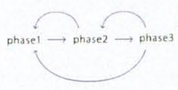


fig2. 諸段階の移行

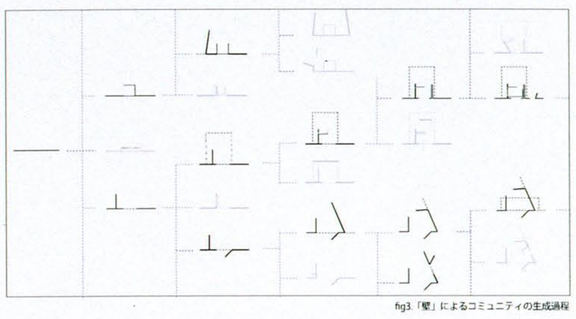
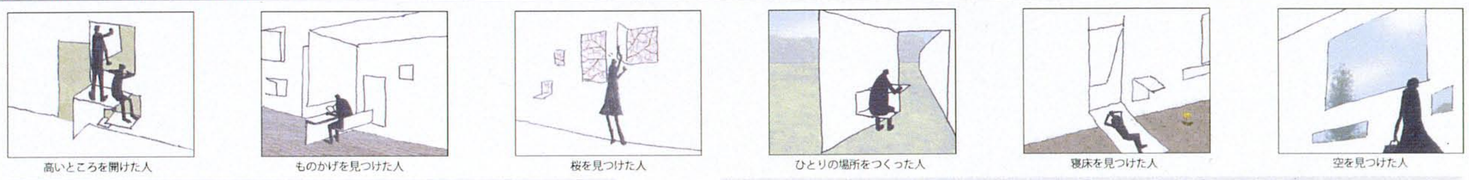
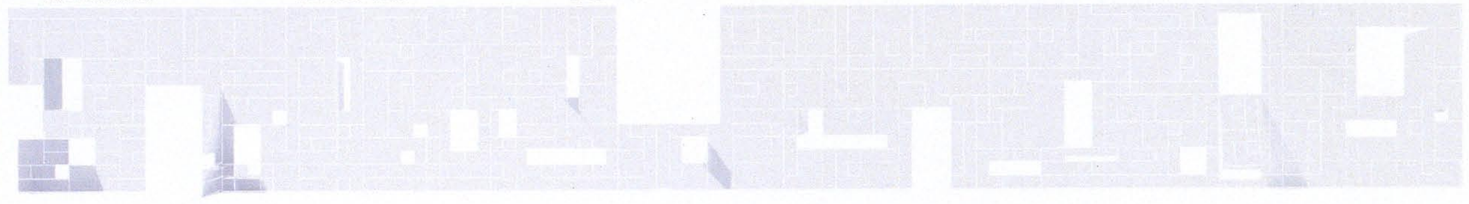


fig3.「壁」によるコミュニティの生成過程

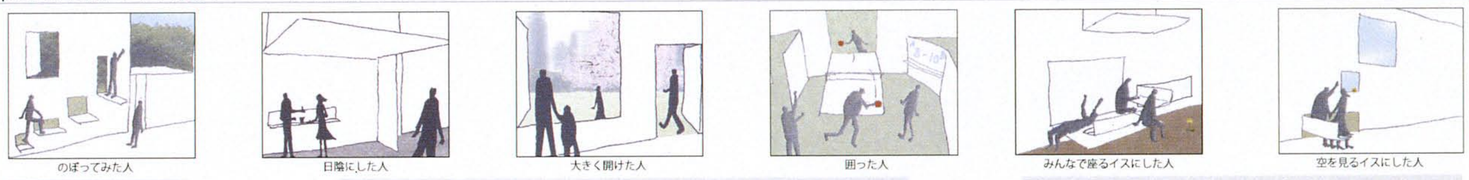
phase1. 個の感覚によって居場所をつくる



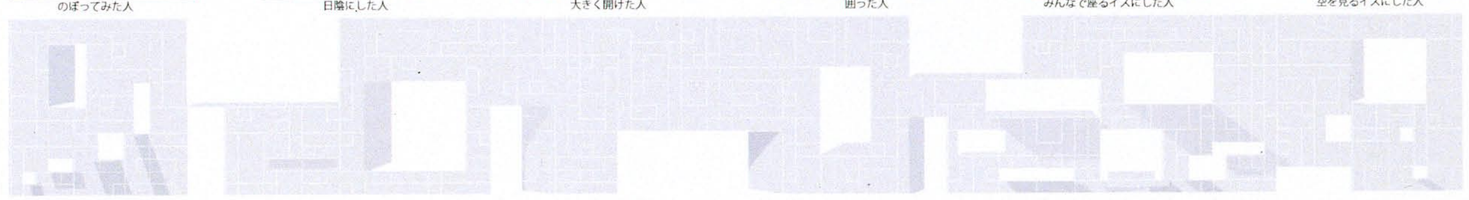
高いところを開けた人　ものかげを見つけた人　桜を見つけた人　ひとりの場所をつくった人　寝床を見つけた人　空を見つけた人



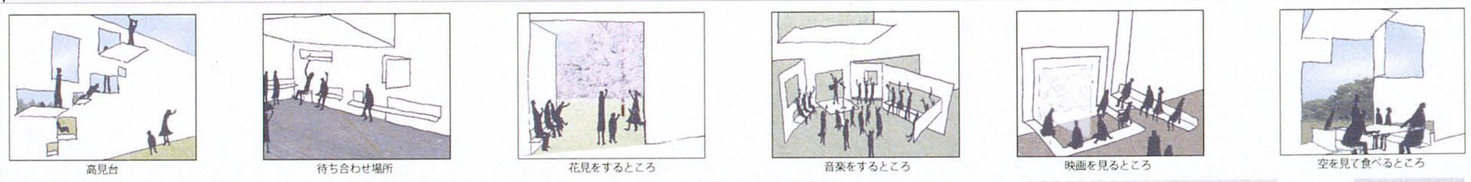
phase2. 合意により小規模のコミュニティが群生する



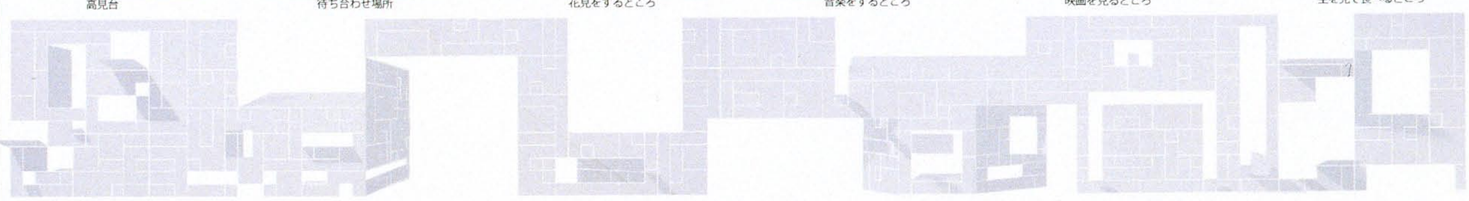
のぼってみた人　日陰にした人　大きく開けた人　囲った人　みんなで座るイスにした人　空を見るイスにした人



phase3. 自然淘汰、突然変異を繰り返しながら成熟したコミュニティを形成する



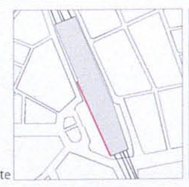
高見台　待ち合わせ場所　花見をするところ　音楽をするところ　映画を見るところ　空を見て食べるところ



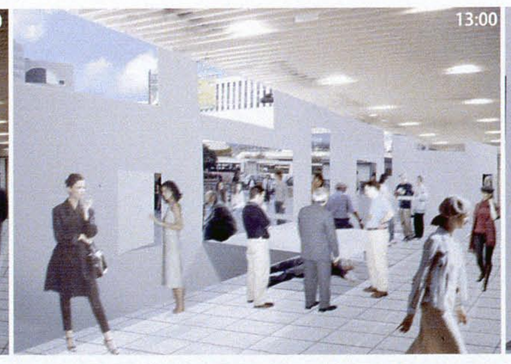
あらゆる場所で展開可能なコミュニティモデルとしての「壁」

case01. 駅のエントランス　―ひとりひとりの意志が日常空間を豊かにする―

駅は、非常に多くの人々に利用されているにもかかわらず、そこに豊かな空間を求められず、ただ行き来するだけの通過点となってしまっている。そこで、コミュニティを発現させる媒体として既存の壁面を「壁」に置き換える。
人々の日常の活動が空間や場所として現れ、「壁」は時間や季節の変化とともに絶えず変化を繰り返す。朝は通勤や通学する多くの人が行き交うため、壁が大きく開けられる。小さな棚を用意して急いで立ち食いをする人がいる。昼になると人々の流れは淀み、大きなテーブル囲んでランチを楽しむ人や、その向こう側でおしゃべりをする人がいて、そこが小さな憩いの場となる。夜になると、テーブルはステージとして扱われ、そこで誰かが歌いだせば人々が群がってみんなで盛り上がる。
たくさんの人々がいるから、様々なアクティビティが展開され、人と共に場所を育むことに喜びや愛着といった豊かな感情が生まれる。



site



case02. 小学校のフェンス　―活動がこどもたちを見守る―

近年、小学校における犯罪の増加により、防犯設備を強化し、こどもたちを守ろうとする動きがある。しかし、一方で地域住民のための施設を併設させるなど、小学校の地域開放化も進められている。そこで、小学校と地域の間にあるフェンスを「壁」に置き換え、そこにゆるやかな境界をつくる。
「壁」は隔てられた関係を繋いでくれる。こどもたちにとっては自由気ままによじ登ったり、滑り台をつくることができる遊具にもなる。こどもがかくれんぼのために用意した場所は、買い物帰りの主婦にとっては休憩するためのベンチにもなる。和気藹々とした表情に誘われて、散歩する老人が向こうのほうからやってきた。
小学校と地域の狭間で積極的な活動が広がることで、地域住民とこどもたちに交流が活性化されると同時に、こどもたちを見守る地域住民の目が「壁」に生まれる。

site